映画『怪物』【特別映画鑑賞教室】 午後の部（中高生・大学生）

是枝裕和監督、映画『怪物』の舞台・諏訪で中高生・大学生と対話！

伴瀬萌プロデューサー、録音・冨田和彦氏も登壇し制作秘話を明かす

「生まれ変わらず、今の自分のままでいい」

――ラストシーンに込めた思いから、子どもを尊重する映画づくりまで――

【イベント概要】

- 開催日：2026年11月11日（水）15:40～16:40頃
- 会場：岡谷スカラ座（長野県岡谷市）
- 作品：『怪物』（2023年）
- 登壇者：是枝裕和監督、伴瀬萌プロデューサー、冨田和彦氏（録音 / サプライズゲスト）
- イベント：諏訪圏フィルムコミッション20周年記念事業「特別映画鑑賞教室」

2026年11月11日（水）、長野県岡谷市の映画館「岡谷スカラ座」にて、映画『怪物』の特別映画鑑賞教室が開催され、是枝裕和監督と伴瀬萌プロデューサーが登壇した。さらに、同作の録音を担当した冨田和彦氏もサプライズゲストとして登場した。

本イベントは、諏訪圏フィルムコミッション20周年記念事業の一環として開催されたもの。『怪物』は、脚本を坂元裕二、音楽を坂本龍一が手がけ、2023年に公開された。

長野県諏訪地域を舞台に、母親、教師、子どもたちという異なる視点から、ひとつの出来事を描いていく。

作品の演出意図や制作の裏側、映画監督という仕事への向き合い方など、多彩な質問が寄せられた。是枝監督は冒頭、映画制作をしていると若い世代と直接会う機会

がなかなかないと話し、率直な感想や質問を歓迎。約50分にわたり、参加者の学生たちとの対話が繰り広げられた。

◆坂元裕二の脚本との出会い。「自分には書けない台詞がある」

最初に質問。「どうしてこの映画を作ろうと思ったのですか？」という問いに、是枝監督は作品が生まれた経緯を語った。

普段は自ら脚本を執筆することが多い是枝監督だが、『怪物』では脚本家・坂元裕二から企画への参加を持ちかけられたという。最初に声がかかったのは2018年。新型コロナウイルスの流行などもあり、完成までには長い時間を要したが、その分、脚本家やプロデューサーと作品についてじっくり考えることができたと振り返った。

また、坂元作品には自身の映画と共通する題材が多い一方で、その描き方や台詞の表現には大きな違いがあるという。その象徴として挙げたのが、湊と校長先生が音楽室で楽器を演奏する場面だ。

自分が脚本を書いていたら、湊が一緒に楽器を演奏する相手には、依里や担任の先生を選んでいたかもしれない。しかし坂元の脚本では、物語の中で距離のある存在だった校長先生と湊が音を重ねる。自分では思いつかない発想に出会えることも、他者の脚本で映画を撮る面白さなのだと語った。

◆なぜ消防車のサイレンが繰り返されるのか？ 中学1年生の質問に是枝監督が回答

中学1年生の女の子からは、物語の視点が切り替わる際に消防車のサイレンが繰り返し登場する理由について質問が寄せられた。これに対し是枝監督は、物語が最初に戻ったことを観客に分かりやすく伝えるため、印象的な音を繰り返す演出を取り入れたと説明した。

また、火災の場面から始まり、諏訪湖の水の映像へとつながる構成についても言及。消防車のサイレンや湖の風景を繰り返し登場させることで、異なる人物の視点から描かれる物語に共通する印象を持たせているという。

ひとつの出来事を複数の視点から描く『怪物』。その独特な構成を支えているのは、映像だけでなく、繰り返し耳にする音の存在でもあった。

◆脚本の「正解」を聞かず、スタッフ全員で考える

是枝監督が自ら脚本を書く場合と、他者の脚本を演出する場合の違いについても質問が寄せられた。これに関連して伴瀬プロデューサーは、是枝監督の演出方法について興味深いエピソードを紹介した。

普段の是枝監督は、脚本の執筆から撮影、編集まで、映画制作のさまざまな工程で演出を重ねていく。しかし今回は、坂元が書いた脚本をもとに映画を作ることになった。伴瀬プロデューサーが印象に残っている場面として挙げたのは、湊が消しゴムを拾おうとするシーンだ。

この場面が何を意味するのか、スタッフの間でもさまざまな解釈が生まれたという。しかし是枝監督は、脚本を書いた坂元に答えを尋ねることはしなかった。撮影現場でも編集作業でも、スタッフがそれぞれの立場から場面の意味を考え、議論を重ねながら映像を形にしていった。

脚本を書き換えるのでも、脚本家に正解を求めるのでもなく、スタッフ全員で考えていく。伴瀬プロデューサーは、そんな制作過程に是枝監督らしさを感じたと振り返った。

◆なぜ舞台は諏訪だったのか？ 湖がつないだロケ地

地元・諏訪地域での開催とあって、ロケ地に関する質問も飛び出した。当初、坂元の脚本では、町を分断するように大きな川が流れ、その川が氾濫する設定だったという。制作スタッフは撮影に適した川を探したものの、消防車を走らせるための許可など、撮影上の問題が生じた。

そこで提案されたのが、川を湖に変更するというアイデアだった。結果として諏訪湖を中心に撮影が行われ、当初は別々の場所で撮影する可能性もあった学校や火災現場などが、ひとつの地域にまとまっていった。また、撮影のために多くの子どもたちや工キストラが参加したことにも触れ、地域の協力によって作品が形づくられた様子が語られた。

◆鳥の声も電車の音も諏訪で収録！ 録音・冨田和彦氏が明かす音づくり

映画の音に関心を持つ高校3年生の男子生徒からは、劇中の環境音や効果音について質問が寄せられた。この質問では、サプライズゲストとして登壇した録音担当の冨田和彦氏も途中から回答に加わり、映画の音づくりについて説明した。

冨田氏によると、劇中で使用された鳥の鳴き声や電車の通過音などの効果音は、すべて諏訪で収録したものだという。さらに、映画の撮影が終了した後にも、音を収録するために諏訪を訪れていたことを明かした。映画の舞台となった土地の音を、実際にその場所で収録する。スクリーンに映る風景だけでなく、耳に届く音にも諏訪の風土が息づいていることが伝わるエピソードだ。

また、音楽を担当した坂本龍一についても話題が及んだ。坂本の音楽は、風や水の流れといった環境音に近い形で作品に溶け込む特徴があり、『怪物』でも諏訪湖の水門の音などと音楽が共存するような音づくりが目指されたという。

映像の編集が終わった後にも、映画館に近い音響環境のスタジオで約10日間にわたり、音の調整作業が行われたことが紹介された。映画を観る際、何気なく耳にしている鳥の声や電車の音。そのひとつひとつにも、作品の世界を形づくるための丁寧な仕事が込められていた。

◆「生まれ変わったのではない」ラストシーンに込めた思い

高校3年生の女子生徒からは、子役のキャスティングや作品のラストシーンについて質問が寄せられた。是枝監督は、俳優を選ぶ際、相手の芝居を受けて自然に反応できることを大切にしていると説明した。演技はひとりで完結するものではなく、相

手とのキャッチボールによって生まれるものだという。また、俳優同士のやり取りだけでなく、風や雨といった撮影現場の環境にも柔軟に反応できることを重視していると語った。

続いて話題は、さまざまな解釈を生んできたラストシーンへ。最後に湊と依里は生きているのか。それとも別の世界へ行ってしまったのか。是枝監督は、制作スタッフや出演した子どもたちには、2人は生きていると伝えていたことを明かした。

泥水の中から抜け出した2人が、生まれ変わったのではないかという受け止め方に対しても、そのような意図ではないと説明。2人は別の何者かになる必要はなく、今の自分のままで生きていていい。そのことを自分自身で肯定できた結末として描いたのだという。作品のラストに込められた思いが、監督自身の言葉によって語られた。

◆「自分が正解を持っているとは限らない」監督としてのリーダーシップ

映画の内容から一歩踏み込んだ質問もあった。合唱のパートリーダーを経験した中学2年生の女の子が、仲間への伝え方に苦労した経験を踏まえ、監督は自分の考えをどのようにスタッフや俳優に伝えているのかと尋ねた。

是枝監督は、自分のイメージと異なるものが出てきたとき、すぐに否定するのではなく、まずなぜ違うものが出てきたのかを考えると答えた。相手にとっては、その表現の方が自然なのかもしれない。あるいは、自分が書いた脚本の言葉に、表現しづらい理由があるのかもしれない。

まずは相手から出てきたものが正しい可能性を考え、それでも方向を変える必要があると判断した場合には、別の提案をするという。そして、自分が正解を教えるというよりも、相手が自分で正解を発見したと思えるような伝え方を心がけていると語った。映画制作に限らず、人と協力して何かを作り上げるときにも通じる回答だった。

◆映画監督を目指す高校生へ。「まずはたくさん映画を見ること」

「もし今、高校生だったら、映画監督になるために何をしますか？」そんな質問に、是枝監督は、まず多くの映画を見ることを勧めた。

映画には映画ならではの表現があり、それはひとつの言語のようなものだという。英語を身につけるために多くの英語を聞くように、映画という表現を身につけるためには、さまざまな作品に触れることが出発点になる。現在公開されている映画だけでなく、映画が誕生した120～130年ほど前までさかのぼり、過去の作品も含めて幅広く見ることが大切だと語った。

◆子どももひとりの俳優。「チャイルドアクターケア」の取り組み

高校3年生の女子生徒からは、子どもと対等な目線で向き合うために、どのようなことを意識しているのかという質問が寄せられた。是枝監督は、子ども自身が持つ価値観を、そのまま表現できる環境をつくることが大切だと語り、強制せず、待つことの重要性を説明した。

続いて伴瀬プロデューサーは、撮影現場における「チャイルドアクターケア」の考え方を紹介した。近年、アメリカやハリウッドの撮影現場でも取り入れられている、子どもをひとりの俳優として尊重するための取り組みだという。

例えば、衣装やメイクを整えて役に入った子どもを、役名で呼ぶこと。演じる人物が知らない情報については、必要以上に伝えないこと。また、子どもに立ち位置を移動してもらう際にも、身体に触れて動かすのではなく、できるだけ言葉で伝え、必要なら触れてよいか確認すること。伴瀬プロデューサーは、こうした配慮を最近の撮影現場でも取り入れていると語った。

子どもを単に指示に従う存在として扱うのではなく、意思を持つひとりの俳優として尊重する。監督とプロデューサー、それぞれの立場から、子どもと向き合う映画づくりの姿勢が示された。

◆視点が変われば「怪物」も変わる

物語が三つの章に分かれ、異なる人物の視点から描かれていく構成についても質問が寄せられた。是枝監督によると、この三章構成は、2018年に最初に読んだ坂元の脚本の段階ですでに形になっていたという。

第一章、第二章と視点が変わることで、観客が怪物だと思う存在も変化していく。そして第三章で子どもたちの視点にたどり着いたとき、怪物とは自分自身なのかもしれないと気づく。その構成の面白さが、是枝監督が作品に惹かれた理由のひとつでもあった。

ひとつの出来事でも、誰の視点から見るかによって、その意味は大きく変わる。『怪物』という作品が観客に投げかける問いについて、改めて考える機会となった。

◆映画を観ることから、映画について語り合うことへ

今回のティーチインでは、消防車のサイレンや音響、美術といった細かな演出への質問から、ラストシーンの解釈、映画監督という仕事、人との向き合い方に至るまで、幅広い話題が取り上げられた。

是枝監督からは、作品の演出意図や創作に向き合う姿勢が語られ、伴瀬プロデューサーからは、脚本を映像にしていく過程での試行錯誤や、撮影現場での具体的な取り組みが紹介された。さらに、録音を担当した冨田氏からは、映画の舞台となった諏訪の音を実際に収録したエピソードが明かされ、作品を支えるさまざまな仕事にも光が当てられた。

映画の舞台となった諏訪地域で、若い世代が作品を観て、自分の言葉で疑問を投げかける。そして、その問いに作品を生み出した作り手たちが答える。スクリーンの中で描かれた物語が、映画館という場所で新たな対話へとつながった、貴重な時間となった。